

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

112 日間のママ
清水 健著
小学館 2016年2月初版



はじめに

国立がん研究センターは、日本全国で1年間に新たに発生する18歳未満の子供のいるがん患者の数は56,143人、またその子供達の数87,017人と推定し、1年間に0.38%の子供が自分の親ががんと診断されていると発表した(2015年11月)。男性では胃がん(15.6%)、肺がん(13.2%)の順に、女性では乳がん(40.1%)、子宮がん(10.4%)の順に多い。

乳がん注目すると、若年性(35歳未満)は、予後不良のHer2陽性例、トリプルネガティブ症例が多いこともあり、非若年性と比較すると予後は悪い。さらに、若年性乳がんの中でも妊娠・授乳期乳がんは非常に予後不良である。その頻度は乳がん全体の約1%で、決して低くない。(参照；厚生労働省のサイト「若年乳がん」)

今回は、この妊娠期乳がん患者の闘病記を通して、がん患者様の子供について考えたい。

著者の紹介

清水健(しみずけん)；愛称、シミケン。アナウンサー。1976年4月19日、大阪府堺市で生まれる。中央大学文学部社会学科卒。2001年讀賣テレビへ入社。2009年からは夕方の報道番組「かんさい情報ネットten.」を担当、現在、メインキャスター。2013年5月19日、自分の担当のスタイリストで、9歳年下の奈緒さんと結婚。

奥様、奈緒様の経過

2014年4月妊娠。それから暫くして、左胸のしこりに気付く。念の為に検査。4月30日、乳がんと判明。5月7日、トリプルネガティブとわかった。ご主人様は迷われたが、奥様は最初から、出産を希望された。治療方針は、手術→抗がん剤→「出産」→CT・MRI→タキサンを用いた抗がん剤治療→放射線療法。胎児への影響を心配され、出産前はCT検査等控えられた。

最初の結婚記念日の5月19日、滋賀の乳腺クリニックへ入院し、翌20日手術。皮下乳腺全摘術。リンパ節への転移はなかった。退院して、抗がん剤治療開始。胎児のことを考慮し、通常よりは少量使用。副作用はなかった。10月23日、帝王切開で元気な男の子を出産。通常2、3日で痛みが取れるが、腰痛が続くため、MRIとCT検査を施行。肝臓、骨、骨髄への転移が見つかった。余命3ヵ月と言われた。ただし、本人には告げなかった。というより、告げることはできなかった。

すぐに、JCHO大阪病院へ転院。主治医、木村綾先生の計らいもあり、産婦人科病棟へ息子様と一緒に入院。ご主人様も病院から出勤された。11月から抗がん剤療法が始まった。高熱と口内炎の強烈な副作用があった。ご飯はまったく食べられず、水分摂取も難しかった。痛みのため、立つことも難しかったが、11月21日、お宮参りへ3人で行かれた。抗がん剤の効果は乏しく、中止となり自宅へ。12月29日、親子3人で、沖縄の竹富島へ正月旅行。

腹水、胸水のため呼吸困難となり、さらに肝性脳症も併発し、2月6日、JCHO大阪病院へ緊急入院。8日、「チャイケモ」へ転院。2月11日午前3時54分永眠。享年29歳。

本書の内容・感想

この本の表紙は、竹富島に旅行された時の写真である。

『僕はカメラのシャッターを切る。旅行ができた喜びとともに必死だった。もちろんこれが最後ではないと信じたかった。でも、残さないといけない、「今の奈緒」を、「ママになった奈緒」を、とっていたんだと思う。「ママは、こんなにお前を可愛がっていたんだ、こんなに優しくったんだよ」と。

優しい表情で、愛おしく、わが子を抱く奈緒。今になって思う。写真に閉じ込められた幸せな「瞬間」、この瞬間を息子に将来、見せてやることのできる、本当によかったと…。

奈緒はこの写真から、ひと月と少したって、僕らの前からいなくなってしまう。ママでいられたのは、112日。だが「温もり」は忘れない、忘れるはずなんてない。』「はじめに」より。

「苦しませず、怖がらせず、痛がらせず」。これが、ご主人のご希望だった。ひとつの選択肢は、ホスピス(緩和ケア病棟)だった。大阪にも整ったホスピスがあったが、「奈緒、ホスピスに行こうか」とは言えなかった。神戸のポートアイランドにある、小児がん専門治療施設「チャイルド・ケア・ハウス(通称チャイケモ)」を選ばれ、その時は入院できるようにお願いされた。小児がん治療中の子供たちとその家族の QOL(生活の質)に配慮した、家族と一緒に生活しながら治療をうけることができる、日本で初めての施設で、病院というより、家という雰囲気なのだ。そのチャイケモへ8日入院。9日朝4時、奥様は昏睡状態へ。

『2月10日。チャイケモに移ってから24時間つきっきりの看病が続いていた。夕方、僕はわがままを言って、病室に奈緒と息子と僕の3人だけにしてもらった。みんながそういう状況をつくってくれた。

僕は息子を、奈緒の顔の横に寝かせた。僕は、僕と奈緒の息子に、「母」の記憶を残してやりたかった。息子が泣いても、奈緒の枕元に寝かし続けた。

「奈緒、元気に泣いているよ」。わが子の泣き声を、しっかりと刻み込んでほしい。覚えていてほしい。

(中略)

夜は、奈緒のベッドの横に、もうひとつのベッドを横付けし、奈緒、息子、僕の3人で、横になった。目の前に、ベッドに横になる奈緒の顔がある。穏やかだった。奈緒の顔は、何とも言えず穏やかだった。

「ごめんな、奈緒。ごめんな」。僕は奈緒の手を握り、ずっと謝り続けた。30分は経ったろうか。低い声はやみ、どンドン呼吸が落ち着いてきた。静かで深い呼吸だ。今度は、お前の番だ。お前のママに、「さよなら」を言いなさい。お前のママはお前を愛しているんだ、お前を産んで幸せいっぱいなんだ。僕は、奈緒の腕の中に、寝ている息子を抱かせた。こんなことがあるかどうかかわからないけど、奈緒が息子に何か言うかもしれない。将来のためにも、母子ふたりだけにしてあげたかった。(中略)

11日午前3時54分。僕は、まだ温もりの残っている奈緒の横に、もう一度、息子を寝かせた。パパの代わりに甘えておいで。ママの匂いをいっぱい吸い込んでおいで。温かさを感じておいで。パパはもう充分甘えた。充分過ぎるくらい。さあ、最後のお別れをしておいで。ママをお前の体に、しっかり刻みつけておいで。』「緊急入院。最後のお別れ」より。

冒頭で述べたように、子供さんがいて、がんに罹る人は年間 56,143 人。約半数の方が亡くなられているのであろう。清水さんの息子様のように、本書も含め、多くの思い出が残されていて、亡き親に甘えることのできる人はどの程度おられるのであろうか。胸が痛むと同時に、支援が必要と思う。

理事 井上 林太郎

